記憶の翻訳工房

中尾 光延（山口大学名誉教授、トリアー大学客員教授）

＊翻訳のことなら面白い

聞く限りでは、翻訳については誰しもが一家言をもちうるらしい。だが、翻訳とは何か。あらゆる翻訳は誤訳である、という言いまわしがある。イタリアには、翻訳者は裏切り者、という諺もあるそうだ。二つながら撞着書法ではないか？翻訳について語るものは誰しも、堂々めぐりの撞着書法に無頓着ではいられない。筆者もまたその一人である。それなりの関心もある。しかし、翻訳についての明確な定義に支えられたそれではない。まして、強力な語学の翼で複数の言語文化空間を飛翔し、往来する職業翻訳家や、翻訳書を次々と刊行するいわゆる外国文学者でもない。古典の現代語訳に挑戦する国語学者や作家でもない。はたまた、外交の仕事や国際交流活動に携わりつつ、異文化間のコミュニケーションの実態とあり方に絶えず考察をめぐらせている者でもない。

ないないづくしの者に、翻訳をテーマにエッセイを、という注文である。注文と頭をいちどきに抱えるのは、粗忽者のつねである。そもそも、明解な定義ももたずして、翻訳について何ごとかを語る資格があるのだろうか？日本文化について知ること少ない者に、翻訳について問う拠り所があるのか？堂々めぐりには撞着書法がよく似合う、と思う。けれども感心ばかりしていても始まらない。このままでは翻訳御堂の内陣を覗き見ることすらできないではないか。思いあぐねていると、ふと気づくことがあった。人間だれしも習慣の動物である。生活習慣病など当代の流行りではないか。思いついて書棚の隅から或る翻訳書を探し出す。パンツを穿いた猿の話が書いてある。あちこちめくってみる。人間と動物とどちらが上部概念であるのか。両者の境はどこにあるのか。肝腎の情報は読み取れない。使うあてのない鉛筆を何本も削る。転がり落ちた消しゴムを探す。机上の埃を拭う。鉛筆でゆるりと引っ掻くべきか。カタカタと粗忽な音をたてるキーボードを叩くべきか。思うに当為の志向と逃避願望の闘いは、人も言うなる未明の下意識下で行われているらしい。決着がつくまでは、上部意識は手を拱き、待つばかり。書くことは、書く以前のことがすべてを決定する、と誰かも書いていたではないか。翻訳について書くことは翻訳以前について書くことだ、と転じてみる。だが、以前のことは已然のこと。隠されたものを見つけ出し、怡然自得の境地を垣間見ることができるか。ひょっとすると、翻訳の奥義は集団忘却の深井戸の底に沈んでいるのか？未然の想像の翼の陰に隠されているのか？

＊記憶をすなどる言葉

そもそも締め切りの本性は、生け贄の逃げ足などにはお構いなく、容赦なく迫ってくることにある。苦し紛れに、翻訳にまつわる連想を書きとめてみる。なんとかのあと智恵、という俚諺もあることだ。連ねた俚語を眺めていればなにかよい智恵が浮かぶかも知れない。これは理知的な俚智とは言えない。書くとは、灯りももたずに、霧に閉ざされた過去の海に小舟で乗り出すようなもの。漂っているうちに、

またしても、はたと気づくことがあった。翻訳とは、異言語文化間の交流として狭義に解されるのみならず、未知であり異質である哲学や思想や文化概念が、言葉やイメージや記号やらで、理解され、解明され、解釈されることでもあるとするならば、それは誰しもの試行錯誤の営みであること、に。ならば、舳先も定まらない櫂を失くした小舟の船端からでも、言葉やイメージや記号やらを釣り糸代わりに、記憶の断片が釣り上がるのをあてどもなく待ってみても面白いではないか。たとえ獲物がしょっぱい一滴の水でしかないとしても。それにしても、と思う。記憶の深井戸、想起の泉（ハラルト・ヴァインリッヒ『忘却の文学史』）と言われながらも、個人の記憶には共同記憶が、共同記憶には個人の記憶が浸透していることも忘却してはならぬはずだ。個人の記憶と共同記憶は裏腹なのだ。頼りがいのありそうに見える言葉すらも、その活気は共同記憶に培われているようだ。言葉もイメージも記号も、社会関係の網で掬い上げられ、コミュニケーションによって結ぼれるはずではないか。翻訳の言葉もまた、個人と社会と交流関係のなかで織られているのかもしれない。

＊〈エッセイ〉はなに語？

ところで、求められたのはエッセイである。エッセイとは、英語単語の近似発音を片仮名表記したもの、と辞書にある。随想、随記の字義にくわえて、小書評、小論文、小批評をも含む、とある。西洋語を日本語化したものであれば、〈エッセイ〉は〈翻訳語〉である。翻訳語も日本語である。人は、〈エッセイ〉が〈翻訳語〉であることなど特別に意識することもなく、日本語とみなす。〈エッセイ〉の語の成育史を図式化すれば、英語→日本語→翻訳語→日本語となる。少々ややこしい。〈エッセイ〉もまた、〈哲学〉や〈理性〉や〈社会〉や〈美〉や〈個人〉やなどの、〈由緒正しい〉翻訳日本語や他の片仮名表記の外来語とともに、日本語のなかになめらかに溶け込んで、恬としたたたずまいである。日本語は寛容な言語である、とも思う。と同時に、日本語には古きを活性化する〈老人力〉と新規を受容する包容力のふたつながら備わっている、とも思う。日本語の、言語としての品格の問題はまた別である。

＊〈翻訳大国〉日本？

〈エッセイ〉のような翻訳日本語は、複数の言語文化の影を背負っている。むろん、そのような影は、中国漢字文化や仏典文化や片仮名外来語やもろもろの翻訳文化を受容してきた日本語文化を掩い始めてから久しい。たとえば、同一漢字でも中国語と日本語では意味づけが異なるものがある。中国漢字文化→日本漢字文化となるが、この場合の→印を担っているのは〈翻訳〉である。〈日本語共同体〉は、〈古日本語〉、〈新日本語〉、〈漢語〉、〈翻訳語〉、〈片仮名外来語〉などなど、その他多くの構成員から成っている。むろん、翻訳語も〈日本語共同体〉のなかに同化され、いったん同化されれば、その出自の特殊性を問われることも少なくなる。そしてまた、翻訳語も、他の新生日本語同様、日本語文化のなかで生き死にするだろう。しかし、幾重にも輻輳する異言語の〈日本化〉のプロセスを、もしも〈翻訳〉と名づけるならば、日本語文化もまさしく〈翻訳言語文化〉であり、巷間に言われるように、日本は〈翻訳大国〉なのである。だが、明治以降の〈近代化〉の過程ではじめて〈翻訳大国〉に化けたのではない。太古は知らず、漢字導入の古き時から、日本は〈翻訳大国〉なのである。しかし、〈言の葉の國の人々〉が、かかる〈翻訳大国〉で生き死にすることをつねに強く意識してきたかどうかはまた別問題である。のみならず、〈翻訳大国〉は日本にだけ妥当する表現ではない。他の多くの場合もそうであるようだ。この問題を論じるには通時、共時の両視点が必要である。

＊〈エッセイ〉と随筆

さて、もろもろの〈大国〉には、ときに秘密と謎が、ときに面妖さとうさんくささがつきまとうのが世のならいである。〈翻訳大国〉についてもまさに然り。陰の部分はさておき、ここでは、〈異国語から日本語へと変身を遂げた翻訳日本語としての日本語〉（ややこしい日本語！）が、日本語表現を豊かにする生産性を秘めていることに注目する。喩えるならば、翻訳語は移植されてはじめて豊かな花実をつけた樹木のようなものである。翻訳語〈エッセイ〉もまた同種のようである。たとえば〈エッセイ〉をかりそめに〈随筆〉と〈日本語化〉してみる。つまり日本語から日本語へと〈翻訳〉してみる。これはこれで、新生〈翻訳化日本語〉としてしっくりと落ち着いているではないか。むろん、『枕草子』や『徒然草』は、漢字文化の文脈の延長線上で〈随筆〉と呼ばれてきたのであるから、いまさらに〈エッセイ〉を翻訳して〈随筆〉としてみるのは意味がない、とする向きもあるだろう。だがしかし、旧来の〈随筆〉と、〈エッセイ〉から翻訳されてできた〈随筆〉は、その特性を違えているのである。後者には射し込んできた異文化の光と影が新しい視点を与えている。かりそめに、『枕草子』や『徒然草』を〈エッセイ〉と呼んでみるがよい。古来の〈随筆〉につきまとう概念に距離を置いて、より広い言語空間のなかで、日本的文化概念を考察する視点を与えられる思いがするではないか。諸外国の〈エッセイ〉との比較対比が容易になること請け合いである。〈エッセイ〉という日本語は、西洋文化、中国語文化、日本語文化の三者の影が背後に見えかくれする〈国際化された日本語〉である。だからこそ、〈エッセイ〉という器には、小論文、批評、時評、感想文、漫筆、雑文など種々のものが盛り込めるのである。

＊翻訳語は国際語？

ところで、〈翻訳日本語〉と〈国際化日本語〉とは同一概念である、と言えるだろうか。〈概念〉の語自体、ドイツ語の〈Begriff〉から作られた翻訳語である。英語やフランス語の〈concept〉は近い親戚である。この語は、日本の近代黎明期に、〈哲学の小道〉をくぐり通り抜けるうちに抽象性を高め、いまは広く、〈高度な抽象性〉を備えた〈概念〉を表現したいところで用いられる。ところで、〈抽象〉は〈Abstract〉を元にした翻訳語であり、〈抽象概念〉も、〈書き言葉〉の世界ではしばしば用いられる。〈抽象概念〉は二文字翻訳漢字熟語と二文字翻訳漢字熟語を組み合わせた四文字漢字熟語となって日本語共同体の舞台にデビュウした。（この四文字熟語は〈トートロジー〉語法ではないか？）。それはともかく、概念という日本語は、原語〈Begriff〉に含まれていた、より〈抽象性の低い〉〈概念〉についての表現、たとえば、〈……は折り紙付きだ〉とか、〈……についてはよく知っている〉などという表現に対して通例用いることはない。〈Sonyのブランドは世界の概念である〉とすると、これは〈翻訳調〉の響きをもつだろう。この語、ドイツ語から日本語へ〈翻訳〉される過程を経て、古くからの日本語には少ない〈高次な抽象性〉をよりよく表現する可能性を開いたが、ドイツ語原語には含まれていた〈低次抽象性〉的意味は切り捨ててきたのである。そのため、この翻訳語は〈話し言葉〉のなかに同化することなく、むしろ〈書き言葉〉の方に肩入れする言葉として生き延びてきた。結果として〈近代的〉な〈言文一致文体実現運動〉に逆らうことになったのである。この翻訳語は、日本語共同体に同化する過程で、特定の表現を強化することで、日本語の〈国際化〉の窓口をより広く開く可能性を与えたのである。それでは、たとえば〈抽象概念〉を多く含む日本語論文は、西洋語へ翻訳しやすい、と言えるであろうか？

＊翻訳語の生産性

ところで〈翻訳語〉と〈国際化日本語〉の違いはどこにあるのか。動物と人間の場合と同様、両者の境界は定めがたいようである。落とす日本語文化はたえざる異文化の水波に洗われてきた。それゆえ、それぞれの日本語の出自が、異文化の落とす陰も生々しい〈翻訳語〉であれ、時間をかけて同化され融合後の〈国際化日本語〉であれ、古来固有の〈日本原生語？〉であれ、それらは相互に融合し、同化しあって、日本語言語文化として生成発展してきたようである。中国漢字文化を知らずして日本語文化は語れず、ヘブライ言語文化やギリシャ・ローマの古典語文化への理解なしで近代西洋言語文化を論じることは不可能である。言語には、すべからく、〈国際語〉としての面妖な顔貌と、内に秘めた豊饒な生産性がつきまとうものである。翻訳語から生まれて〈国際化〉日本語に出世した〈エッセイ〉という一語にすら、翻訳言葉が〈原生日本語〉に与える可能性が示されているようである。もしも、個々の〈翻訳語〉にしてそのようであるなら、〈翻訳文章〉や〈翻訳文化〉はなおさらのことであるかも知れない。鷗外や漱石のような近代日本の黎明期の〈翻訳〉文学者がそのことを実証してはいないだろうか？

＊鷗外も漱石も哲学の育ての親？

森鷗外は、ドイツ語学修の上達の秘訣を問われ、ラテン語の勉強を深めるのがよい、と答えたそうだ。彼にならえば、日本語の上達には漢字文化の学修を怠らない方がよい、となるに違いない。それはともかく、翻訳家鷗外が、ラテン語文化のさらなる源流を意識しなかったはずはないと思われる。鷗外の先達でもある西周が〈Philosophy〉を元に、まず、ギリシャ語の原義に近い〈賢哲の希求〉という意味を汲み、その直訳語として〈希哲学〉という翻訳語をつくり、さらに縮めて〈哲学〉としたとき、〈哲学〉なる訳語が遠く〈賢哲の希求〉、〈愛智〉というギリシャ語を秘めていることを知らなかった筈はない。そのギリシャ語やラテン語も、また現代の西洋語も、古典言語文化を背後に秘めた〈国際語〉であることは言うまでもない。〈哲学〉という〈国際語〉を生み出したのは西周であるが、育ての親のなかには鷗外も漱石も含まれている。両人がこの新生日本語を育てたのは小説という揺籃のなかである。鷗外はその『渋江抽齋』で、漱石は『三四郎』のなかで。以後、〈哲学〉の語は日本語文化の中に溶け込み、いまもなお生き続けている。生き続けてはいるが、時代を席巻する〈インターネット・ウェッブ〉の津波に、〈哲学〉や〈愛智〉や〈人生智〉やなどの樹木が根こそぎ押し流されることはないだろうか。彼ら賢哲や文学者が〈哲学〉という翻訳語を重用することで、近代日本の新しい〈哲学〉の道が切り開かれたことは事実である。もとより人間は、〈哲学〉という言葉が創られる以前から〈哲学〉的〈存在〉（この語も翻訳語。柳父章『翻訳語成立事情』）であることは言を俟たないにしても。ものごとには功罪両面がある。言葉にそれが無いとは誰も言えない。後世が〈愛智〉の概念を表現したいときに、〈哲学〉という言葉が邪魔をすることがあるかも知れない。しかし、その咎を彼ら明治の〈先哲〉が負うべきであるか否か。翻訳語は、魅惑的にして剣呑な存在でもありうる。

（鷗外は、一言語の上達のためには他言語の学習が必須であるとした。だからといって、たとえば、わらべ唄や数え歌、謎々問答や昔話、漫画やゲーム、その他として〈サラダ短歌〉でもなんでもよい、日本語に隠された宝探しなどで遊びつつ、言葉への自意識を深めさせつつ、日本語の〈アイデンティティ〉（適切な訳語はないものか？）を早目に確立させることがなにより重要である小学校低学年生に対して英語教育を押しつけようとする発想は、言葉への洞察を欠いたこのうえなく貧しいものである、と思う。のびやかな遊びの時間を奪い取りながら、代替品のように英語教育を押しつける、子供たちへの

愛と見識を欠いた教育は悲しまれるべきもの以外の何ものでもない。教室に忍び込む〈灰色の時間泥棒〉たちを跳梁跋扈させるほどの、我々は貧困な時代に入ったのだろうか。しかし筆者は、例えば、〈エッセイ〉や〈哲学〉や〈真理〉や〈隣人愛〉や〈ボランティア活動〉や〈国際貢献〉などの〈翻訳語〉を含む〈国際化された日本語〉のもつ可能性を、たとえ予感のかたちであれ、児童たちに知らせ、教えることに反対はしない。)。

＊美味しい道草というものはない。道草の美味しさだけがある

ここでとりあえず、日本語〈エッセイ〉を日本語〈随筆〉と翻訳してみる。両者は、発想法も内容もまた書法も自由度の高い、どこか小説に似ているところがある。ところがここに、〈随筆〉と〈小説〉を重ね合わせることによって、ドイツ文学における表現革命を成し遂げた文学があるところがある。ローベルト・ムジールの『特性のない男』である。ドイツ文学史上空前絶後の大長編。一気に読み通すには、それなりの心準備と覚悟を必要とする。なおさらのこと、原語で読むならば、長文の連続に息切れしないよう、事前に肺を鍛えておく必要がある。息切れを起こすだけでなく、あわや窒息しかけた人も身近にいるほどだ。長さだけではない。これは表題からしても難解な〈哲学〉小説なのである。小説〈哲学〉と反転してもよい。〈特性のない男〉という翻訳語は、翻訳本のなかでだけ棲息できる日本語のようだ。なにしろテーマは、現代文明の真っ只中の、理性中心の一元的世界観に拠る西洋近代思想への〈反措定〉なのである。モティーフは、一元論世界観と二元論的世界観の対立であり、相克なのである。むろん主人公（プロタゴニスト）は西洋近代において魂の〈実在〉を擁護する。一元論的世界の信者から異議を申し立てるドイテラゴニスト（第二役者）もトリタゴニスト（第三役者）（舌がもつれる）も加わって、仮想の精神の帝国〈カカーニエン〉を巡りに巡る。原作者は道草を食べながら書き綴る。絶対的に相反する価値観の〈止揚〉なのである。難解でないはずがない。

＊新しい文体の発明が新しい小説をつくる

小説の舞台は、中世の面影を色濃く残す、かつてのオースト・ハンガリー二重帝国の首都。未完の大長篇小説のテーマは、神なき世界における存在の意味の探求である。作者によれば、世界と事物と人間はそれぞれ二重の意味を有している。〈日常という意味性〉と〈魂の遠近法によってのみ透視できる意味性〉の二つである。二つながら未然の理念でしかない。後者の実在を証明することが作者の課題である。これは難題である。しかし、作者にとっての難題は、読者にとっての難解さに通じる。ムジールは後者の理念を〈魂の千年王国においてのみ成就しうる禁断の愛〉と〈翻訳〉する。彼は、この困難な〈翻訳〉作業を進めるために、革新的な文学的書法を採用した。小説とエッセイ、物語的書法と哲学的思考をオーヴァー・ラップさせる不思議な文体である。それは作者にとって、必須かつ必然的な方法であったと思われる。それは、彼の他の作品を、たとえば『若きテルレスの惑乱』、三部作『三人の女』、『黒鶫』などを、〈基本構造〉として支えている文体でもある。それが〈エッセイイズム〉（物語的随考？）と呼ばれることがあるのには十分な根拠がある。しかし、ムジールの、理性という強力なヘラで〈世界も事物も人間〉も薄っぺらに均すことに狂奔する〈近代〉への根底からの批評精神を信じない人にとっては、このような前人未踏の〈翻訳〉の試みは、たんに、反合理主義、反理性主義、〈言語神秘主義〉としか理解されないかも知れない。ムジールは、新しい小説のために新しい方法を発明したのである。

＊翻訳の面妖さ

ところで、〈翻訳〉という営為には、ある種のうさんくささ、面妖なところがつきものである、と思う。異国語のテキストを日本語で表現する翻訳だけではない。ただ読解それ自体を目的として異国語のテキストに向き合うーこれも翻訳であるー場合も同様である。かかる面妖さはどこからくるのか。日本語を解さない外国人と会話を交わす場合を想定する。語彙、表現、意味内容の理解が不十分のままに会話が終始することがある。事後の機械的再現では、会話時の言葉のニュアンスや輝きは失われ、発声された言葉の声調、声色、声体を復元することはもはやかなわない。不満足が残る。異国語で記されたテキストの翻訳の場合ではどのようであるか。テキストの語彙、構文、表現、文体、構成、意味づけ、メッセージなどの調査に千手が尽くされても、作者の地声が聞こえてくるというほどの理解にたどり着くことができるのか。地声の響きは、異国語でのそれか、日本語でのそれなのか。そもそもテキストの理解とは何を意味するのか。疑問は尽きない。翻訳の実践に踏みこめば、おそらくは誰しもが強く意識することがある。日本の言語文化についての認識不足である。翻訳対象言語文化と日本語のそれの両者にかかわる、容易に解消できない認識不足に直面したときの不満足感。翻訳者としての自意識の昂揚をたえず曇らせる黒幕でもある。しかしむろんのこと、テキストの〈真性の〉読解無しには理解なし、と独断的に言ってみてもはじまらない。なによりも〈誤訳〉だらけの翻訳書からさえ、おおくの感興を与えられることがある、という反証もあることではある。なぜこういうことが起きるのか。

＊翻訳は日本語世界の〈内包〉を富ませ〈外延〉を拡げる？

ところで、読書は、読者の参加をまってはじめて成立する。読者とテキストとの間の生産的なコミュニケーション（辞書によれば、意思・感情・思考・情報などにつき、言語、文字、身振り、情報機械などを媒介として行われる相互伝達や相互交流のこと。この語、簡潔にして適切な翻訳漢字は無いものか？）こそ、読書の本意である。読者が対象書物に対していかなる契機づけができるか、何を付加し、何を引き算するか、何を補填するか、つまりは書物との交流いかんに読書の一切がかかる。読者個人の思い入れ、期待感、心準備、影響を受けたいと願う心持ち、これらが読書の質を決定する。テキストに対する違和感、拒絶感に支配される時ですら、読者は〈理解〉（〈誤解〉）し、〈受容〉（〈拒絶〉）する。それが翻訳書であれば、すべてが二重になる。しかし、翻訳書が、その書法、文体、表現のニュアンスなどのすべてにおいて、読者に格別の刺激や示唆を与えることがある。その実それらの半ばは読者がみずから創り出したものである。それゆえ、翻訳書の読書は、理解を超越した受容を成立させる可能性がある。たとえば〈翻訳調日本語表現〉を通して、背後の異言語文化を想像させる。異言語文化と日本語文化を対比させることになる。翻訳者も翻訳書の読者も忙しいのである。誤訳、直訳、意訳、悪訳、珍訳、迷訳だらけの翻訳書ですら、読者に刺激を与え、感興を起こさせることすらある。〈あらゆる翻訳は誤訳である〉、〈あらゆる読解は誤読である〉という言いまわしにあっては、翻訳や読書の意味深さが反語的に表現されていると見る方がより生産的であるようだ。

＊原語につけば角が立つ。原意に棹させば流される。とかく、翻訳世間は生きづらい

ドイツの犬は日本の犬、と表現することが可能であれば、その逆に、両者はまったく異なる動物である、という表現も成り立つ。ドイツの犬は日本の猫だ、とする翻訳があったとしても、ドイツの犬と日本の猫が同時に存在している文脈のなかでは間違った表現ではない、ということもありうる。ドイツの

猫は、日本の狸である、と訳出する翻訳者もいるかもしれない。ドイツの犬はドイツの犬と、日本の犬は日本の犬と訳さなければならないとする翻訳者は、言葉の些末主義にとらわれ過ぎて表現の奥行きを狭めるかもしれない。ある翻訳者は、〈イヌ〉という科学的な〈国際共通語〉から〈権力に媚びるイヌのような人間もいれば、人間のように高邁に振る舞うイヌもいる〉、という比喩を作りだすかも知れない。このとき、翻訳者は、言葉の内部に潜む比喩の力を引き出しつつ、新しい日本語を創造したのである。翻訳者は、異国語でもなく日本語でもない、或る新しい日本語を、すなわち常識では不可解な〈翻訳語〉を創造することに夢中になるかもしれない。

さて、一方で、翻訳者は小心者、という言いまわしがある。翻訳者は、一方では異国語の不可解さに悩み、他方では日本語の可能性を探しあぐねる人であるからだ。翻訳者は、日本語の中に異国語のそれに対応する語義を探し、語彙を見つけ出し、必然的に新しい文体を考案しなければならない、と思うかもしれない。場合によっては新しい日本語を案出しなければならない。日本語文化を異国語文化に翻訳する場合には、異文化間の深淵に架ける橋の、構造から材質、色彩にいたるまでの全体のデザインを熟考しなければならないだろう。色々のことをしてみたいと思い煩うので、それらの可能性の森の中で迷わないようにしなければならない。翻訳者は小心者たらざるをえないのである。

＊翻訳者の冥利？

〈翻訳を広義に解して、異なる二つの文化間を行きつ戻りつしながら、両者を対比したり、置き換えたり、移し替えたり、書き換えたり、読み替えたり、つまりは〈翻訳している〉ときに、たとえば、両文化がたしかに接しているという実感を掴んだり、両者が交錯する境界域に新たな〈文学空間〉が顔を覗かせていることを発見したり、すなわち「翻訳」が成立しているという確かな実感が得られるときに、幸運かつ偶然にも、原作や異文化から、未知の、独自の、特性のあるメッセージの核心や、原作者の執筆のやむにやまれぬ必然性が、つまり原作や原作者の地声のようなものが伝わって来る、と思われるときには、翻訳の営為につきまとううさんくささはどこへやら、そのような場所でこそ息づいている新たな〈ことば〉が存在していることに気づくことがあるかもしれませんし、気づけばそれをなんとかして日本語に直してもみたいと思うものです。そういうときひとは、翻訳の営為にはある特別の恵みのようなものが含まれている、と思うことができるのではないでしょうか〉。

この〈翻訳調〉の一文は、お世辞にも美しい日本語とは言うことができない。内容に動機づけのできない者にとっては、読み通すことすら苦痛であるだろう。しかし、〈翻訳調〉はくせになる。

〈異国語の眼に見えないくびきから逃れることのできない翻訳文は、それが日本語としての違和感を与えるとき、すなわちそれが〈翻訳〉という営為の泥沼から生まれ出てきたばかりの日本語であることを意識するときに、まさに異国語に近づいたと思わせる力を示すことがあるのではないだろうか。日本語の美しい流れと内的な韻律を重んじた翻訳創作作品も、異国語に忠実であろうとして日本語の悪文になってしまったものも、いうなれば両者とも〈名訳〉の候補になりうるのである〉。

たとえば、大江健三郎の初期作品を特徴づけている〈翻訳調〉の文体は、もし〈正調日本語文章〉というものの存在を仮定し、その仮定を念頭において読むならば、くりかえし愛読可能な文章であると評価されることは少ないであろう。これらは、〈正調日本語文章〉から見れば、〈悪文〉以外のなにものでもない。にもかかわらず、これらの作品を、かりそめに〈翻訳文〉として読むならば、不思議なことに、絵や写真のように美しくはないにしても、またこの〈翻訳調〉文章の背後に、たとえば、作者の文学的

教養の基礎にあるかも知れないフランス言語文化世界を透かして見ることはとうていできないにしても、表現の可能性の探究をうながす新生日本語文章として読み取ることは不可能ではない。作者は、このような翻訳調の文章を考案しつつ文学創造に踏み出すことを決意したかのようである。作者はやむにやまれぬ必然から〈翻訳調〉文章を創造したのである。

＊〈翻訳〉の語は近代の翻訳語ではない

ところで筆者は以前、翻訳という言葉は翻訳語ではないかと思いこんでいた。無知もいいところであった。哲学、科学、技術、理性などの言葉が、福沢諭吉や西周やその他の先哲たちの手によって西洋語から作られた翻訳語である、という断片的な知識が誤った連想の迷路に入り込ませた張本人であった。〈翻訳〉の語もまぎれもなく欧米語からの翻訳語であると思いこんでいたのである。辞典をひいてみる。手元の漢和辞典（『漢和中辞典』角川書店）では、〈翻〉の字の原意として、〈鳥などが飛ぶこと〉、〈ひるがえること〉、〈物事が変わること〉などとあり、〈訳〉の字義として、〈ことばの意義〉、〈言われ、理由〉などが挙げてある。〈翻訳〉の字義を〈ある国のことばを、他の国のことばに直す〉として、中国の隋書にすでに現れていることも記してある。狭義の翻訳を〈或る言語の或る言葉の意味を、他の言語のそれに直すこと〉と理解すれば、その意味での〈翻訳〉の概念は、中国漢字文化、日本語文化を通して、少なくとも一千数百年以上も前から、ほとんど変わっていないのである。つぎに『日本国語辞典』（小学館）を覗いてみる。それによれば〈翻訳〉の語は、中古の文献（「此大般若教はもろこしの大宗の時麟特年中に玄奘はじめて翻訳して」：『観智院三宝絵ー下』）に現れていることが記されている。文字面も、また主要な語義も一千年以上も前から今日に至るまで日本語世界に一貫しているようである。江戸時代後期の例（「これを手初にして、世医の為に翻訳の業を首唱せしなり」杉田玄白：『蘭学事始』）も同時に示されている。『蘭学事始』は杉田玄白の回想記であり、オランダ語医学書を『解体新書』として翻訳した時の苦心談が記されている。そのオランダ語原書はドイツ書からの翻訳書であったので、『解体新書』は、〈重訳〉の翻訳書ということになる。むろん、重訳も三重訳も翻訳の範疇に入る。彼ら翻訳者たちは、〈神経〉や〈軟骨〉などという翻訳語を創作しながら、解剖学用語という新しい日本語の遠眼鏡を通して、彼らの時代と来るべき時代を見透かそうとしたに違いないのである。

＊翻訳と日本の近代化

鎖国制度によって閉ざされた世界を世界とせざるを得なかった江戸時代の儒学者たちは、中国漢籍、なかんずくその古典を翻訳しつつ、儒学思想の研究を深めることで、彼らの学問の拠り所を見いだしてきた。儒学思想は、江戸幕藩体制を支えるイデオロギー（〈価値判断付き観念体系〉？簡潔で適切な訳語はありえないのか？）となり、日本人の思考方式に巨大な影響を与えてきたことは、思想史研究（丸山真男・加藤周一『翻訳と日本の近代』など）に明らかなとおりである。江戸時代も末期になると、『解体新書』翻訳のような〈西洋学〉に携わる人々もあらわれるが、儒学者たちが漢籍の「翻訳」を基礎にして開発したイデオロギーが、行動形態、思想信条の立て方に至るまで人々の間に浸透したことは特記すべきことである。前述書は、江戸時代の儒学者たちの翻訳活動が近代初期の活発な翻訳活動の礎となったことを強調する。事実、明治政府は、西洋をモデルとした日本の〈近代〉の創設を模索し、国家の命運を〈近代の創設〉に委ねたのである。それゆえ、欧米諸国に派遣された留学生の使命は、〈近代化〉のモデルを欧米諸国のなかに探すことであった。この時期に多くの歴史書が翻訳されたのも、政

治権力体制の近代化の参考書とするためであった。留学生の派遣同様、欧米の文物、制度、文明、文化の〈日本化〉従って〈翻訳〉は、世界に門戸を開くことを迫られた日本国家にとって死活問題であった。そのことを、明治政府は強すぎるほど強く意識していた。しかし、強すぎる国家意志の落とす影は、留学生の心情に癒しがたいトラウマを残すことになったのである。

＊翻訳者の光と影

留学生たちは、留学中はもとより、帰国してからもなお、欧米の社会制度、政治権力の構成、経済活動の進め方、先進工業技術の導入、はては大学組織や軍事組織にいたるまでの、もろもろの情報、知識などの探偵者であり、情報の収集者であることを使命づけられていた。使命を果たすためには、彼ら留学生はまず欧米文化・文明の〈翻訳〉者である必要があった。彼らは、望むと望まざるとに関わらず、いわばつんのめるように急坂を転がり続ける日本国家の近代化をささえる不可欠な人材であり、荷車の車輪であった。森鷗外がドイツに派遣されたのは、西洋の医学や衛生学などを研修し、その学問を日本社会に〈移し替える〉という国家目的に添ったものであり、かたやイギリスに派遣された夏目漱石の方も、英語教育法の実情を調査し、帰国後の外国語教育法に奉公するためであった。両者とも、国家的〈通訳〉、国家的〈通辞〉、国家的〈翻訳者〉であらねばならなかったのだ。両者にとって翻訳とは何であったか、と問うことは、日本の近代化という問題の核心に切り込むことになるはずである。

＊鷗外の立てた渾身の戦略

森鷗外が陸軍省から医学、衛生学の研修を命じられ、すでに国家体制の〈近代化〉を達成し、いまや外部へと視線を向けつつあったプロイセン・ドイツへ渡ったのは、彼が22歳、1884年のことである。ところが留学生鷗外の精神的背骨は、儒教的道徳、倫理観を建て前とする日本の伝統文化であった。鷗外は、儒教的世界観と西洋近代の個人自由主義思想が自己の内部で激しく相克することを感じていた。しかし、留学生は帰国して生き延びなければならない。鷗外はいかなる戦略を立てたのだろうか。鷗外は、『かのように』のなかで、東西文明・文化の価値観の差異を考察するだけでなく、〈本質的な差異から生じる自己矛盾を止揚する〉（翻訳語だらけ！）道を探し求める。鷗外は、基本的人権の尊重や個人の思想の自由などの理念が西洋近代の根底にあることを認めつつも、一方で個人の社会関係における〈義務〉の尊重を、暗に、しかし強く主張することになる。鷗外の考えでは、近代文明の危機が生じるのは、「神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になって認めずにはゐられないが、それを認めたのを手柄にして神を潰す。義務を蹂躙する。そこに危険は始て生じる」（森鷗外『かのように』）からである。もとより、西洋近代にとっても、思想的には神の死を、社会的には神の不在を認めることによって、近代創設の根拠としてきた西洋にとって、個人の「義務」の問題が個人主義にならぶ重要な問題であったことを鷗外は見逃さない。折から、欧米諸国は〈国家の個人主義〉の追求に狂奔するナショナリズムの時代に突入していた。日本近代化のモデルに擬せられた西洋近代は、〈自由〉と〈義務〉の間に生じた厳しい矛盾の解決の必要性に迫られていた。鷗外は、西洋近代を懊悩させる問題が、日本の近代化の道程線上に、早晩姿を見せることを予感していた。『かのように』においても、〈義務〉と〈自由〉の相克がテーマである。そこでは、価値あるもの、尊敬すべきものを存続させる〈義務〉を果たすことなしに人生はありえない。世界の意味を構成しているもののなかには、そうである〈かのように〉思われ、見なされているものが含まれている。ゆえに、〈人の道〉は、世界と人間

の存在にはあたかも重要な意味がある〈かのように〉生きることにある、とされるのである。それこそが、帰国留学生鷗外の戦略的な基本哲学であった。鷗外の全生涯は、〈かのように〉の哲学を礎に、国家の近代化のために西洋医学や衛生学を普及させ、文芸思想の近代化のために数多くの西洋文学を翻訳するために殆どが費やされた。しかし死に臨んで遺した言葉には、かかる厳しい生を彼に強いた〈近代国家〉日本への、強い疑惑と不信の念で染めあげられているかのようである。鷗外は、彼の全生涯を律した哲学を最後には放棄したかったのであろうか？辛辣で、孤独な遺言の言葉は、〈翻訳者〉が辿らなければならなかった道の険しさを示してあまりある。

＊地獄の門は入りやすいか？

鷗外の翻訳のなかには今日に至るまで高い評価をうけ続けている作品がある。『ファウスト』と『即興詩人』である。前者は、ゲーテのドイツ語韻文調を日本語韻文調に置き換えるという困難な仕事であった。現代語で訳された幾種類もの『ファウスト』を読んだあとでは、都度、読み直したくなる〈名訳〉である。そこには、文語日本語調の〈品格〉のある日本語の美しさが体現されているからだ。後者の『即興詩人』は、アンデルセンがデンマーク語で書いた小説のドイツ語訳を日本語訳したものである。アンデルセン原作と鷗外訳『即興詩人』を直接比較して、「……この翻訳からアンデルセンの原作を思い浮かべることは不可能です。」（長島要一『森鷗外　文化の翻訳者』）と断言する証言もあるように、『即興詩人』は、ドイツ語訳を素材にした鷗外の創作以外のものではない。『即興詩人』の一節を引いてみる。

> われは生まれかはりたる如くなりき。ダンテは實にわがために、新に發見したる亜米利加なりき。我空想は未だ一たびも斯く廣大に、斯く豊饒なる天地を望みしことなかりしなり。その岩石何ぞ峨々たる。その色彩何ぞ奕々たる。我は作者と共に憂へ、作者と共に楽み、作者と共に當時の生活を閲し盡したり。地獄の關に刻めりといふ銘は、全篇を讀む間、我耳に響くこと、世の末の裁判の時、鳴りわたるらん鐘の音の如くなりき。その銘に云く。
> こゝすぎて　うれへの市に　こゝすぎて　歎の淵に
> こゝすぎて　浮ぶ時なき　群にこそ　人は入るらめ
> あたゝかき　情けはあれど　おぎろなき　心にたづね
> きはみなき　ちからによりて　いつくしき　法（のり）をうき世に
> しめさんと　この關の戸を　神や据ゑけん

雅文調の文語体であり、内的な韻律が漢文調であることは見紛いようがない。文語調、漢文調、翻訳調の三重奏である。なかでも、地獄の門の標語の箇所が、たおやかで優美な五七の日本古来の詩的韻律で詠われていることが際だつ。この〈翻訳〉の完成までに十年近い歳月が費やされたことからみても、この〈翻訳〉は鷗外にとって重要な意味をもっていたことが分かる。『即興詩人』は、鷗外がアンデルセン原作のドイツ語訳を下敷きにして、〈かのように〉の哲学で織り上げた創作以外のものではなかった。鷗外は「第十三版題言」で記している。「是れ予が壮時の筆に成れるIMPROVISATORENの譯本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし。放膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須ゐざるべし。……」、と。この〈翻訳〉が「訳書」であり、「放膽にして無謀なる嘗試」であることを明言する。ここでは、〈翻訳者は裏切り者〉という諺と、〈翻訳とはすぐれて文学的

かつ創作的作業〉とした哲学者ベネデット・クローチェの表現を、同時に思い出すのが至当のようである。その両者が鷗外〈訳〉の『即興詩人』には妥当するからである。ここでは鷗外は〈裏切り〉に徹することにより、新しい日本文学を創造しえたのである。青年森林太郎は、東洋の伝統の記憶を携えて欧州近代に渡った。欧州滞在時に彼はいかなる新DE
記憶を一身に刻み込んだのか。帰国留学生鷗外は、生涯の記憶から何を想起し、何を忘却しなければならなかったか。語るのはただ遺された鷗外の言葉だけである。それにしても。鷗外は、『即興詩人』を携えることで、すべての人間が潜りぬけるという地獄の門を安んじてくぐれただろうか？